根源

夢ノ浮橋

作者 雅亭

画 国貞

七

根源實紫（こんげんみのさき）

七

上の巻七

根源實紫

上巻

笠亭仙果作

梅蝶樓國貞画

泉喜太板

東京都立中央図書館 伊藤文庫

皆岸山八萬葉集第十九の巻ホ大伴家持卿霍公鳥の聲を聽舊を感ぶに勝へ
ずして作る判官大伴の池主ホ贈られし歌ホて 當時家持々ハ越中ち和我勢故菅
手攜而 曉来者出立向暮去者振放見都追念鴨 池そへハ京ホ在ら比ち
見奈疑之山ホハ峯ホ波霞多奈婢伎谿敝ホ波海石榴花咲宇良悲春之
過者霍公鳥伊也之伎喧奴 獨耳聞婆不怜毛云こと有。此見奈疑之山
を名所とし秋萩覓山部も舉ら此外ホ古來咏る歌あること多し射水郡ホどに在
て舘の邊りといふ人もあるとて宮地春樹といふ人の云ホハ此ハ山の名ホ非君と吾と国衙
近き山の霞や万葉摺の咲るを觀て意を慰めしと其山とふ詞ホて山の名ホあらずと
いふ此説寔ホ宜し見奈疑之の見ハ即觀望する見奈疑之ハ風波の和靜しを待ぐ
いふこ同語ホて慰むといふも憤怒の反對ホて猶此巻ホ山振花を詠歌
上畧 折毛不折毛毎見情奈疑乎茅繁山之谿敝ホ生流山振乎屋戸ホ引植而云又茅

十一の巻ホ

紫式部

伊勢大輔清水に籠りて紫式部と

伊勢物がたり第一

十五段 大淀の濱ふけふ

てふ多くの心ハ多くれども

われども是皆心の多くさむ由あり皆

岸と称ぶ山より此あるを任まと惟規の云けるを茂足へらも傾き

有理本国より山多く立山富山礪並山三上山室津山黒坂山石動山多く数

あまたなりと皆岸とやいふ傍より戸渡り差出て高くて知らぬ霍公

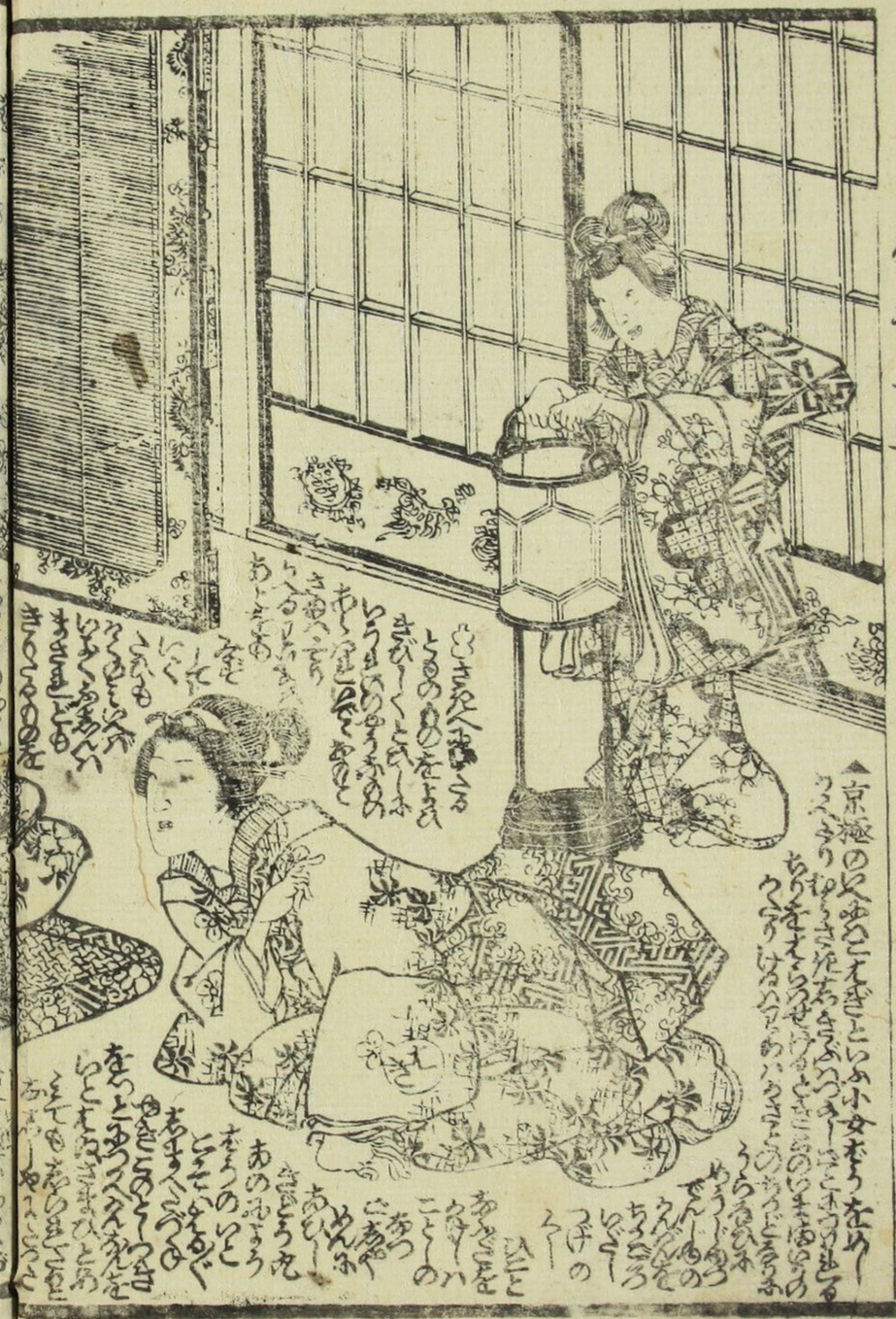
鳥伊勢頭殿の山を問ふ人に左と云ふ歌の山を詠ずる

山名と歌ハ歌と前考後考の作とれりなくて仏ると口説と博識新て明りけり

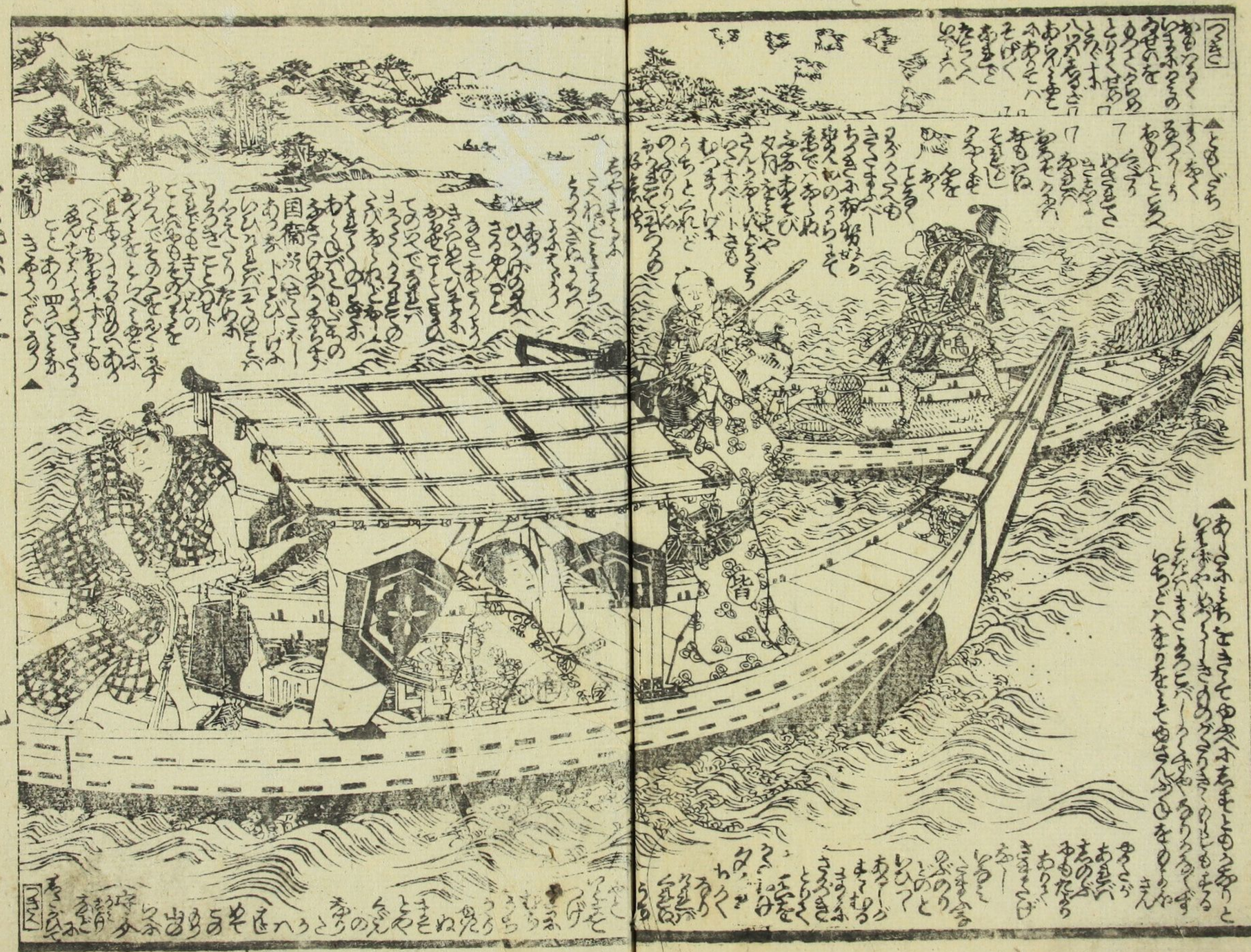
歌よみ

ところ

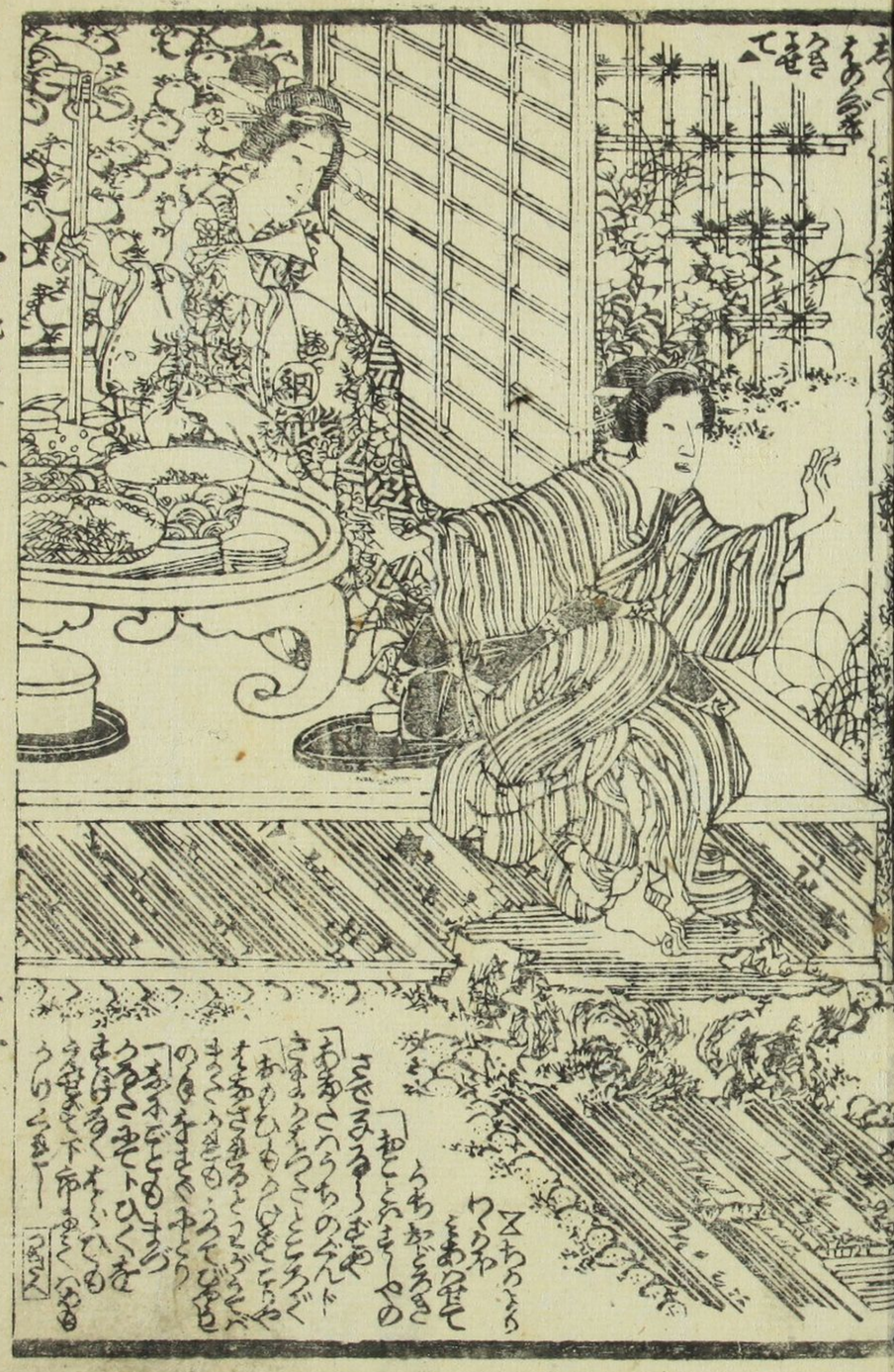
紫式部
信孝松浦の旅館ふ家信を得る
作しゃ
故郷の小紙を
ふてゝ用て
口吾の
景色を



二の巻



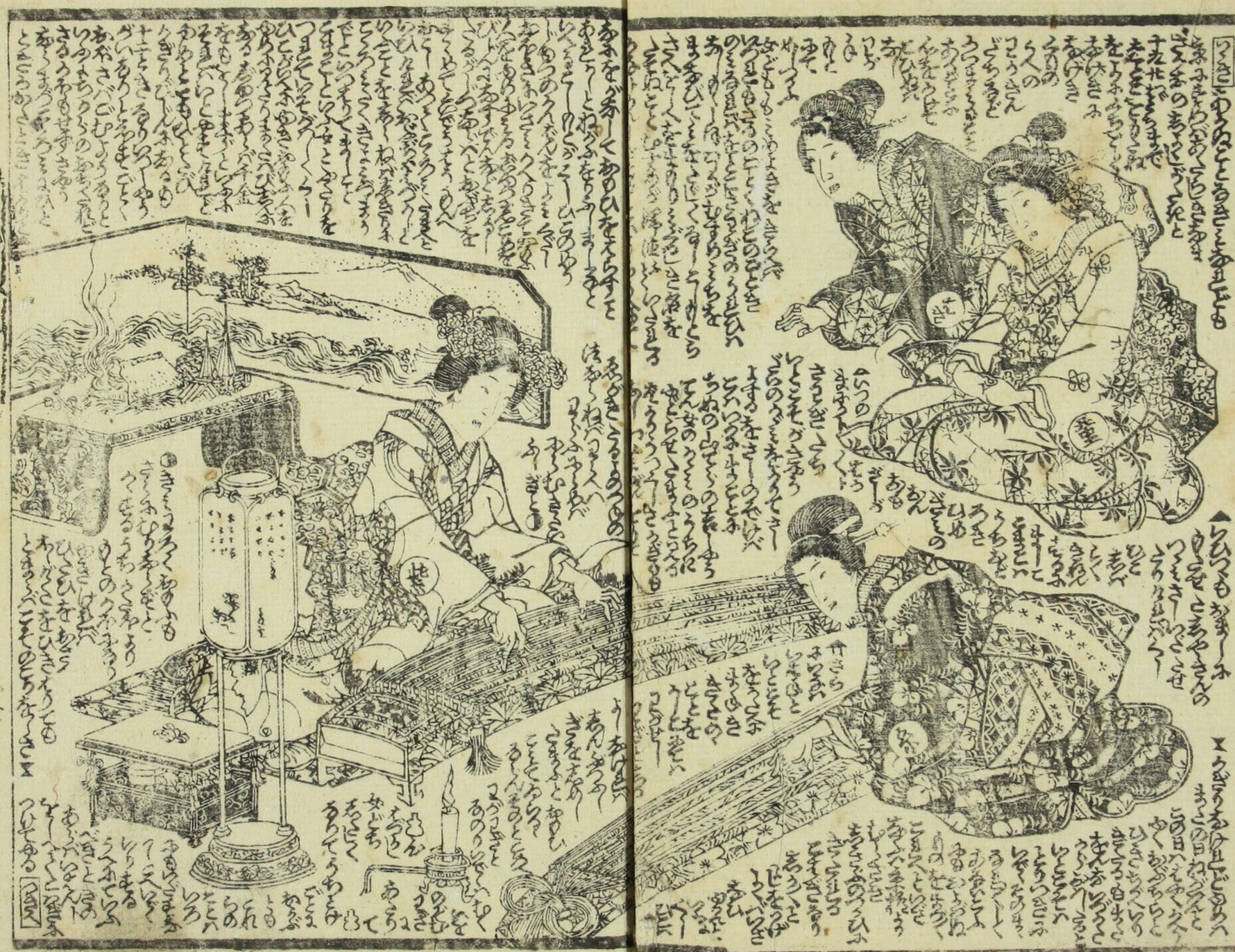
荒
惟
物
槙



貞
伯

賣卜並妙術傳
後

つき
櫛
白
糸
貝
袋



柳蝶柳画柳亭の作

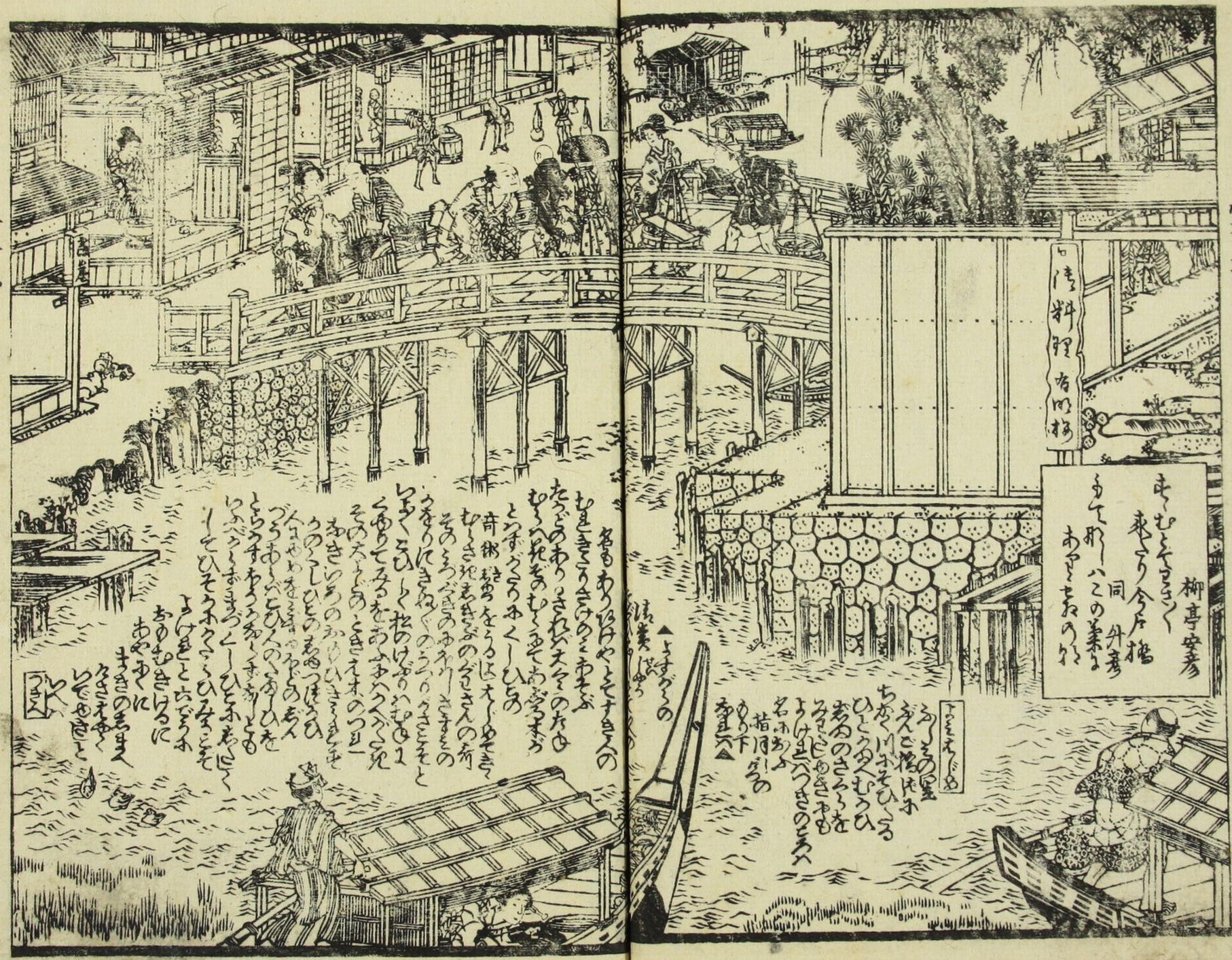
紫式部 鰛魚を喫夫れ石清水の歌作しとなる雑談は新井白蛾の牛馬問に載せり。御伽草紙乃猿源氏ふい此話を和泉式部のなり寸。兎にも角ふるいぞーとゐいとーの秀句。假字も錯後人の偽作論なれど。鰯の異名を紫とへ東山殿時代より大上臈御名のなりと云本ふるしなりて。此奥紫色ふるーのうねび若ー彼話ふり出しふゆ。序心にかゝるも無益心癖あり。式部ハ人の前ゆをを一の字も知らぬ顔ーして博覧振を大嫌ある。日本紀の御乃と綽号を呼。源氏を作て地獄に墮ーと今物語に妄語ーも。餘勝ーー賢女故嫉を議ーー浮名ゆく。高名人ふも今古貝顔肩の引仆ーる必ーり。好とる反ゆる評ふる程の境界ハいと口惜ー。いつも拙ゑとつもる計愚作ゑる讀人のしが愚作者の歡喜ハ上やさらふべき

辛酉新春

二世 柳亭種彦

左衛門尉宣孝
建部屋
菊江

入佛供養
迎講式
来四月廿日
紫式部
闘鶏野樹彦
藤原宣孝再出
下市校手兒

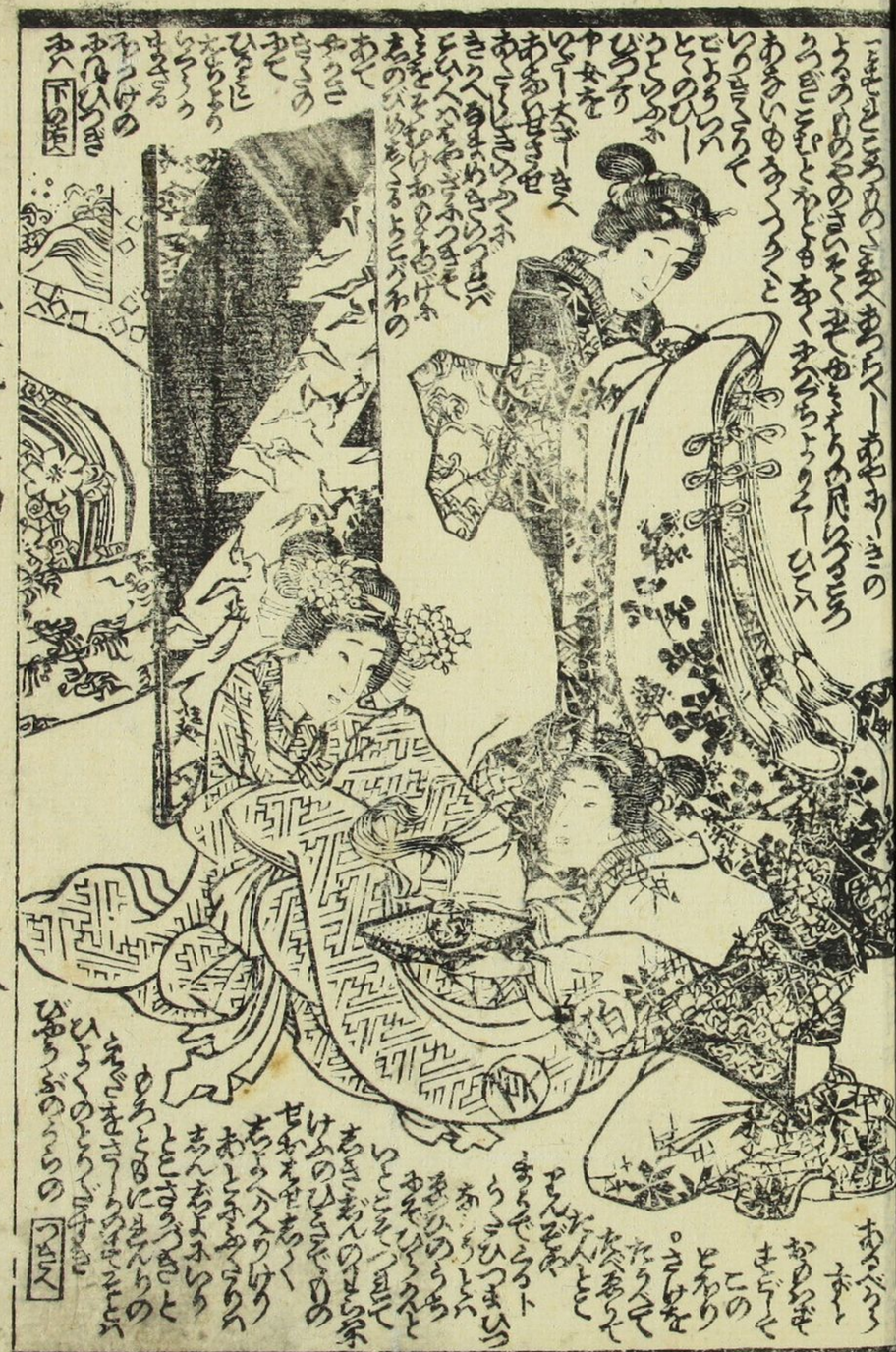

柳亭安彦
同 升彦
清料理 古田橋

梯
糸
撥

拍
貫

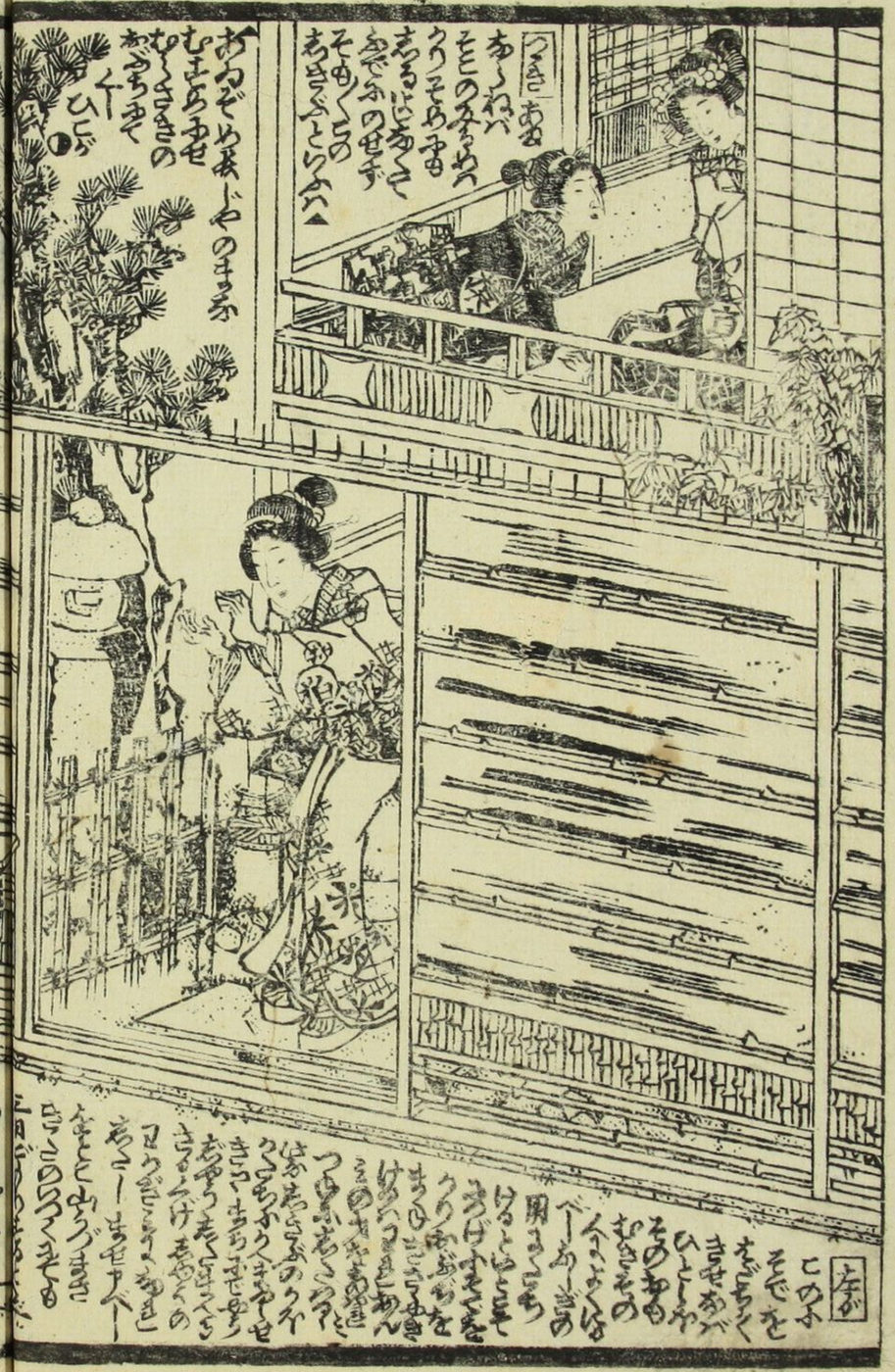
つゞき

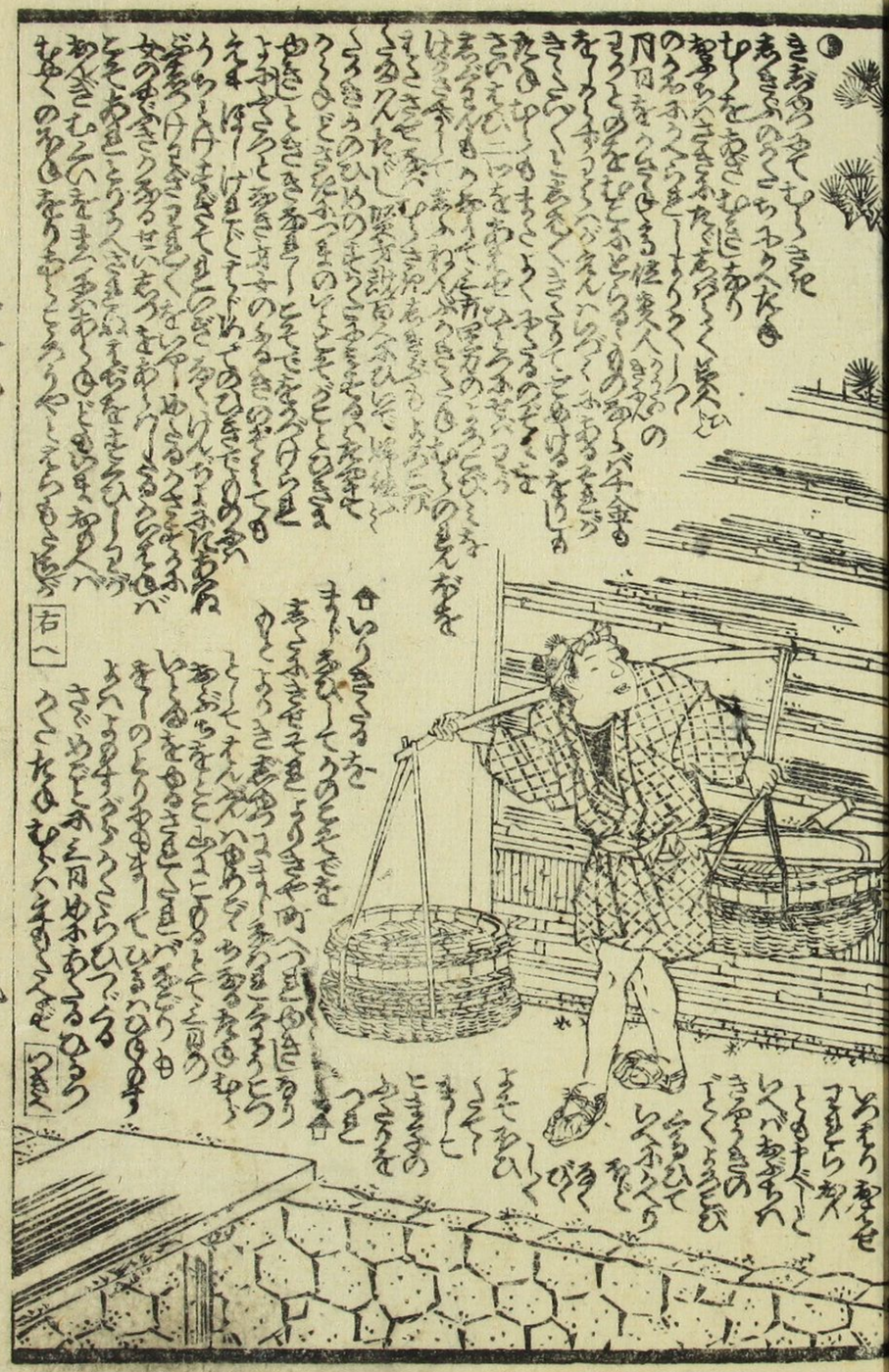
左のよ



つゞき

下の段

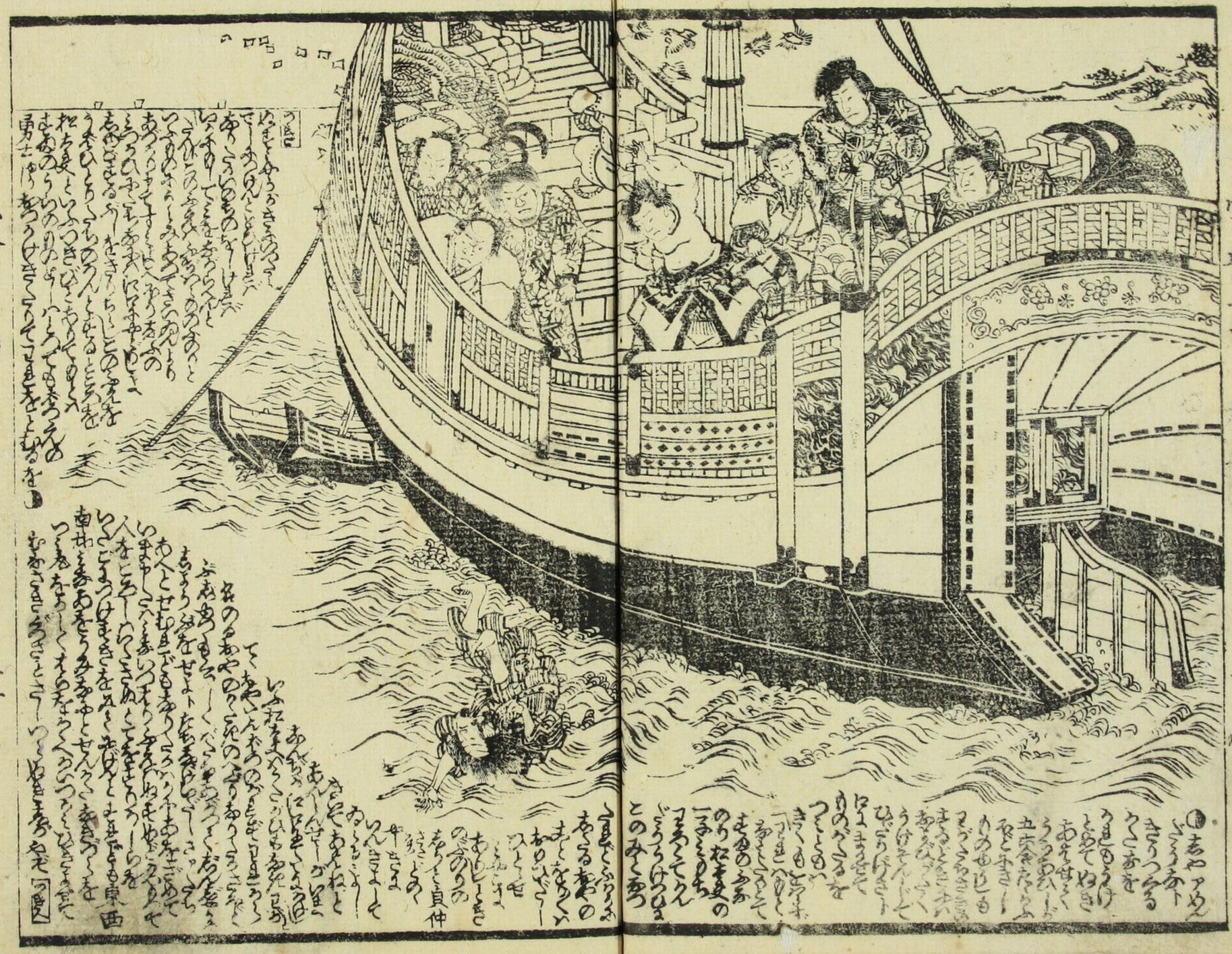


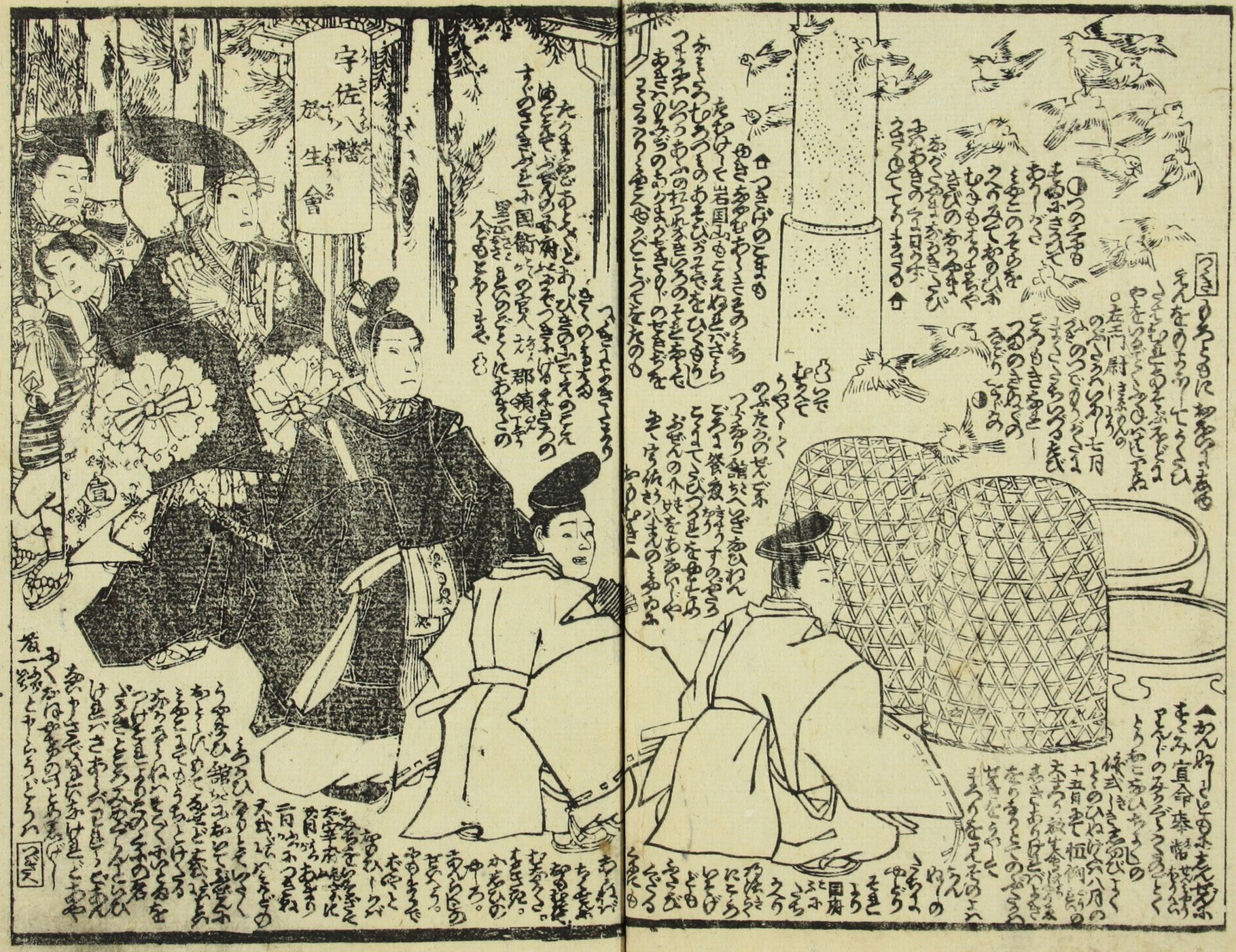


猿
宵
種
伯

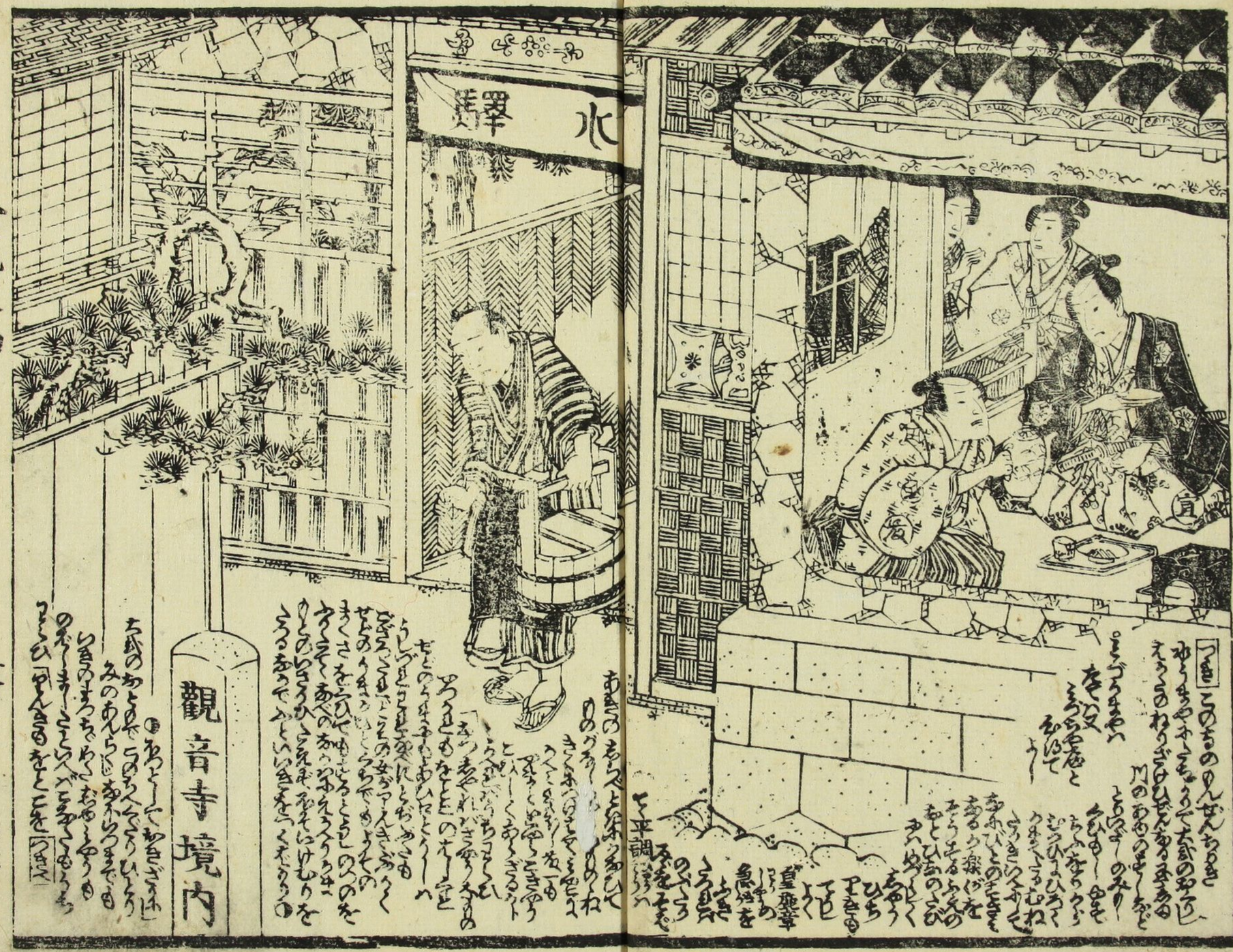
種彦著
國貞画
鳴

孔子ほか
陳蔡きんの
老実極紀はりきの
盗世間の
英雄豪傑と
積
嘆




宇佐八幡放生會

太宰府安樂寺聖廟心字池之圖
宣
四


水輝
觀音寺境内

つゞき　大江のとのへあるあんごのつぎの日ことしらのちうしんうぞくくまぶちりくりうぞちうくけふの二十日まえどこうでもあるまいぐあのぐくハつかぜんくをうふすんこふあのをたむけまるうのちうとぞんトらうくトつぶくうくうあくわどふ大江のくちうまつきこけうまのようふうびんぐどんのこうでもあるまいぐ大江まこうふうのうちうのぞうふうのちうまうまぐまうまうまう

十返舍一九作
滑稽道中膝栗毛

柳水亭種清作
不思議塚小説櫻

同
風俗淺間ヶ嶽

柳水亭種清作
猛田姉妹新白石
同

柳水亭種清作
豊時田秋濃新雁
三篇大尾

関太郎鈴ヶ譚
五篇大尾

出版人 東橋区銀座四丁目三番地 山中喜太郎

曲亭馬琴作
新編金瓶梅全輯
十編大尾

爲永春水作
黃金水大畫盃

同
女郎花五色石臺
十編大尾

柳亭種彦作
琴聲義人錄

同
小女郎蜘蛛手環
三編大尾

笠亭仙果作
根源實紫

柳下亭種員作
兒雷也豪傑譚

柳煙亭種久作
偐紫
一休草紙

林惠海